巻頭言

おもてなし大国、日本へ。

和倉温泉　加賀屋会長　**小田　禎彦**

中世ヨーロッパのホスピス（注）と並び、日本の旅館文化にも千年以上の歴史があります。旅館は、日本のツーリズムの始まりといわれる「お伊勢参り」や「湯治文化」を支えながら発展してきました。お客さまを家族同然のように迎え入れ、大切にしてきたことが日本のおもてなし文化の原点だったのかもしれません。

豊臣秀吉が君主織田信長の草鞋（わらじ）を抱いて温めたという逸話のように、相手が何を求めているのか、心をよみ、先に動くという独特のホスピタリティが旅館で育まれ仲居という仕組みを生み出していったのでしょう。また、朝夕二回の食事において、その土地の旬の味覚を提供したことが日本料理という豊かな食文化につながりました。旅館は、畳、襖（ふすま）、浴衣等、目に見えるものに加え、日本文化そのものを継承してきたといえます。

しかし、明治以降、生活様式が急速に西洋化した結果、現在では日本人にとっても日本文化が非日常となってしまいました。たくさんの外国人が日本文化を求めて日本を訪れます。しかし、その欲求を満たす場が非常に少なくなってしまったのです。幸い、数は少なくなりましたが、志ある旅館は連綿と文化を継承しています。フランスの作家マルローは「文化とは人をつくる装置である」と言っています。まさしく、日本文化とは日本人をつくる装置です。その意味においても、旅館は凝縮した「日本のかたち」を外国人が早く正確に体験できる場所といえるでしょう。

二一世紀に入り情報の流通が加速して、居ながらにしてさまざまなことを知り得る環境が拡大しました。すると、ウェブで知ったものを実際に体験したいという心の満足が求められるようになりました。世界で交流人口が増加している要因は、ビジネスのグローバル化だけではなく個人の体験欲求が旅に駆り立てる部分も大きいと感じています。われわれ旅館には、この欲求に正対しReal Japanを提供し続ける義務があります。それができれば、世界大交流時代の中心となるアジアで旅館の存在価値が認められ勝ち組になれると思います。二年前に台湾北投（ペイトウ）温泉で日本旅館を開業し、海外で日本のおもてなし文化を体験してもらうという挑戦をしています。事業として成功の域には到達していませんが、日本のおもてなしが世界に通用するということだけは確信しました。

国内で宿文化を守り、地域に眠っているユニークな文化を発見、保全、育成、発信して交流を促していくことは重要です。これに加え、日本固有のソフトウエア「おもてなし力」を輸出することが、ものづくりに頼り過ぎていた日本を浮上させる一助になるかもしれません。

世界で一番人を幸せにできる国、おもてなし大国、日本へ。

（おだ　さだひこ）

（注）中世の初めヨーロッパ西部で巡礼や旅行者、病人たちを休ませた宿泊施設を意味している。（公益財団法人笹川記念保健協力財団ホームページより）